

シュパイヤーの二重礼拝堂 ——象徴的意味と政治上の機能に関する考察——

小倉康之

The Double Chapel in Speyer: A Study on Its Symbolic Meaning and Political Function

Yasuyuki Ogura

Tamagawa University Research Institute, Machida-shi, Tokyo, 194-8610 Japan.
Tamagawa University Research Review, 26, 1-16 (2020)

要 約

1080年代初頭、建築家ベンノー・フォン・オスナブリュックは、シュパイヤー大聖堂に隣接する二重礼拝堂の建設に着手した。ハインリヒ4世とベンノーにとって、この二重礼拝堂の建設にはどのような意味があったのだろうか。その建設目的を明らかにするため、筆者は、二重礼拝堂に関する独自の分類と考察を試み、二重礼拝堂に霊廟としての属性が備わっていたことを明らかにする。同時に、シュパイヤーの二重礼拝堂の歴史的定位について論じ、この建築がハインリヒ4世の仮の埋葬場所として計画されたものではないか、という仮説を提示する。上部礼拝堂にいる君主が下部礼拝堂の家臣を見下ろすという空間構成は、王や皇帝の権威を表象するという政治上の機能があったと考えられる。

Abstract

In the early 1080s, architect Benno von Osnabrück set out to build the double chapel adjacent to Speyer Cathedral. For Henry IV and Benno, I wonder if there was any meaning to the construction of the double chapel. To clarify the purpose of its construction, I make my own classification and consideration of double chapels. And it turned out that the double chapel has the attribute of a mausoleum. At the same time, I discuss the historical position of the Speyer Double Chapel and propose the hypothesis that this building was planned as a temporary burial place for Henry IV. It is probable that the spatial composition of the double chapel, in which the monarch of the upper chapel looked down upon the vassals of the lower chapel, had a political function that represented the authority of the king and emperor.

キーワード：シュパイヤー大聖堂、二重礼拝堂、ロマネスク建築、霊廟建築

Keywords : Speyer Cathedral, Double chapel, Romanesque architecture, Mausoleum architecture

1. はじめに

カロリング朝フランク王国のカルル大帝以来、中世ヨーロッパの皇帝権は、古代ローマの建築技術を受け継ぎながらローマ建築とは異なる建築を数多く生み出した。筆者は、「ロマネスク」建築とはローマの遺産を継承しつつゲルマン人特有の造形原理を適用した建築であり、混血の建築文化であると考え¹⁾。

本研究の目的は以下の2つである。

第一の目的は、ロマネスク建築の造形原理を明らかにするため、神聖ローマ帝国の二重礼拝堂におけるゲルマン的建築伝統について考察することである。

一般に、ロマネスク建築の特徴は、ロンバルド帯²⁾、ニッチ列³⁾、小型ギャラリー⁴⁾といった装飾的建築要素に求められている。しかし、そうした装飾に関する考察だけで中世建築の特質を論ずる方法には限界があると思われる。筆者は、二重礼拝堂にみられるロマネスク建築特有の空間構成に注目し、古代建築と中世建築の相違を明らかにしたい。

古代ローマでは、原則として一つの建築用途に対し一つの建築が造られた。初期キリスト教建築では典礼空間と霊廟空間が明確に区別され、ミサのためのバシリカ(長堂)と、聖遺物を祀るマルティリウム(殉教者記念堂)は異なる建築、別棟として建てられるのが通例であった。4世紀以降、初期キリスト教時代のミサが行われた空間は、基本的に矩形プランのバシリカ式建築であり、殉教者記念堂や洗礼堂など、霊廟建築の多くは円形あるいは正八角形プランなどの集中式であった⁵⁾。

だが、中世の建築主は、細分化された各の領地において、さまざまな要求に応える「多目的」な建築を必要としていた。一つの建築に、二つ、あるいは三つ以上の機能が与えられることは、中世では珍しいことではなかったと言える。アルプス山脈以北では、ミサと洗礼、葬祭がしばしば同じ建築において行われるようになり、ロマネスクの教会建築は典礼空間と埋葬空間を兼ねるようになった。そのため、典礼用バシリカと霊廟建築の要素が融合され、複雑で装飾性の強い建築が一般化していった。それがローマ建築とは異なるロマネスク独自の建築様式が生じた歴史的背景である。本稿において、筆者は、ロマネスク建築の独自性を生み出した最も重要な歴史的背景の一つが、ゲルマン人の封建社会における「建築の多用途化」であったと指摘する。

ロマネスクの多用途な空間は、二重礼拝堂においてそ

の特徴が顕著に表れている。そこで、本稿では、主にライン川流域の二重礼拝堂に注目し、比較考察を行い、ロマネスク建築の特徴を明らかにしていく。二重礼拝堂(Doppelkapelle)は、同一の平面上に2つの礼拝堂を上下二層に配した形式で、ドイツとフランスにおいて多くの作例が見出される。二重礼拝堂が分布する領域は、主にフランク族の支配が強固であった地域と重なり、フランク族の皇帝権、王権との密接な結びつきを有していたと考えられる⁶⁾。

第二の目的は、シュパイヤーの二重礼拝堂(図1)の歴史的定位を明らかにし、シュパイヤー大聖堂の建築シンボリズムを読み解くための鍵とすることである。

二重礼拝堂に関する先行研究では、シュパイヤー大聖堂付属の二重礼拝堂の重要性が見落とされてきた⁷⁾。それは、シュパイヤーの二重礼拝堂の存在が1950年代まで世に知られていなかったからである。ハインリヒ4世の命で建設されたシュパイヤーの二重礼拝堂は、大聖堂の南側に造られた回廊の一部として改築され、ほとんど原型を止めないほど姿を変えられてしまっていた。そのため、20世紀後半になるまでその存在が看過されてきたのである。

筆者は「シュパイヤー大聖堂研究」の一環として、この二重礼拝堂に象徴的意味や忘却された政治上の機能があったと考え、数次にわたる現地調査を続けてきた⁸⁾。本稿では、これまでの研究成果を踏まえ、この二重礼拝堂が叙任権闘争の最中、ハインリヒ4世の仮の墓所として建設された可能性、および皇帝権と密接に結びつく政治上の機能が与えられていた可能性を指摘する。

2. 現存作例の類型化

2.1. 二重礼拝堂の定義と研究史の概略

中世ヨーロッパの二重礼拝堂の多くは城塞や宮殿の付属施設として建設されたものであるが、例外として大聖堂や司教館に隣接して建てられたものもある。ゴスラーのザンクト・ウルリヒ礼拝堂⁹⁾は、12世紀第1四半世紀の作例、レーダ宮殿付属の二重礼拝堂¹⁰⁾は、13世紀の作例である。こうした二重礼拝堂の多くは、アーヘンの宮廷礼拝堂などと同じく、渡り廊下で宮殿や城館と連結され、居住空間から直接アプローチすることができた¹¹⁾。また、ランツベルクの二重礼拝堂(図2)のように、山上の城の敷地内に建設された場合には、上下二層

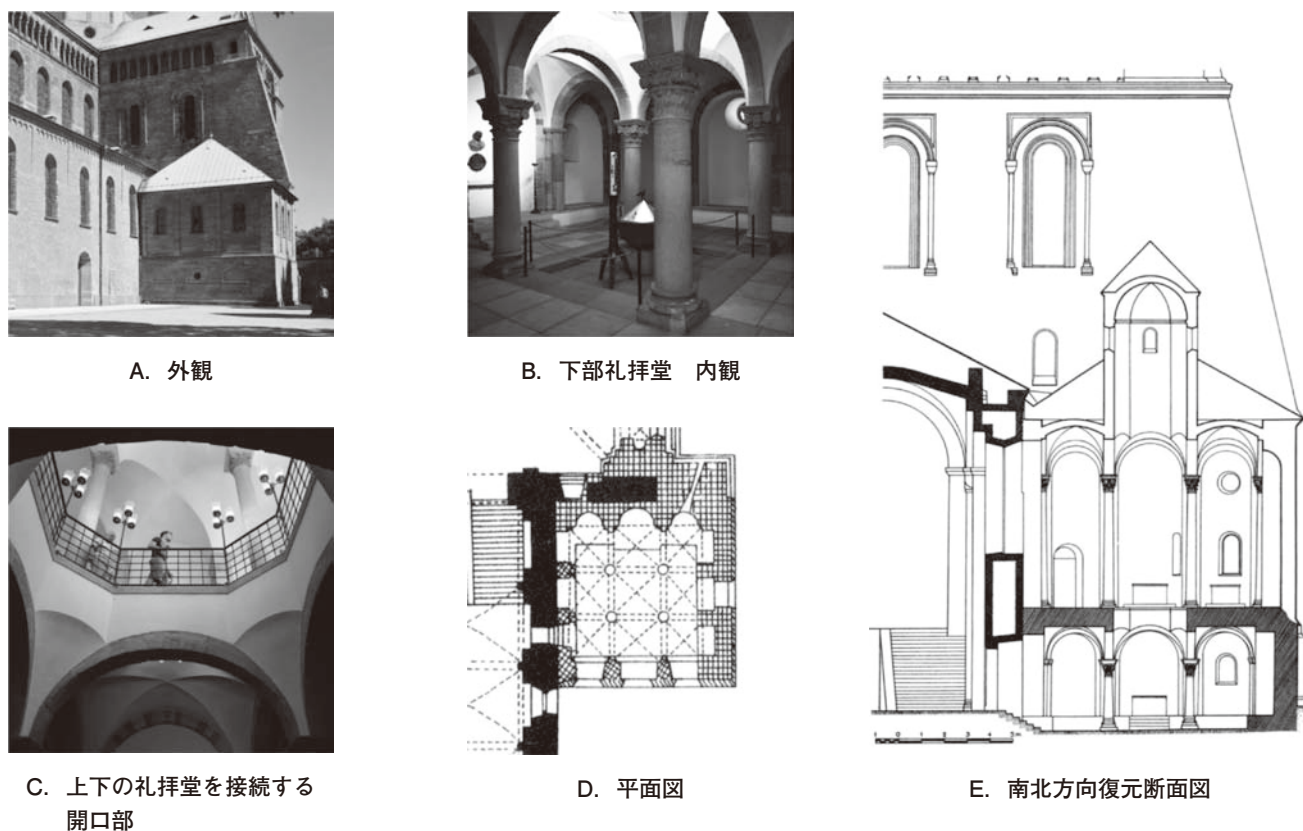


図1 シュパイヤーの二重礼拝堂，下部礼拝堂：1081年頃-1088年，上部礼拝堂：1097-1102年

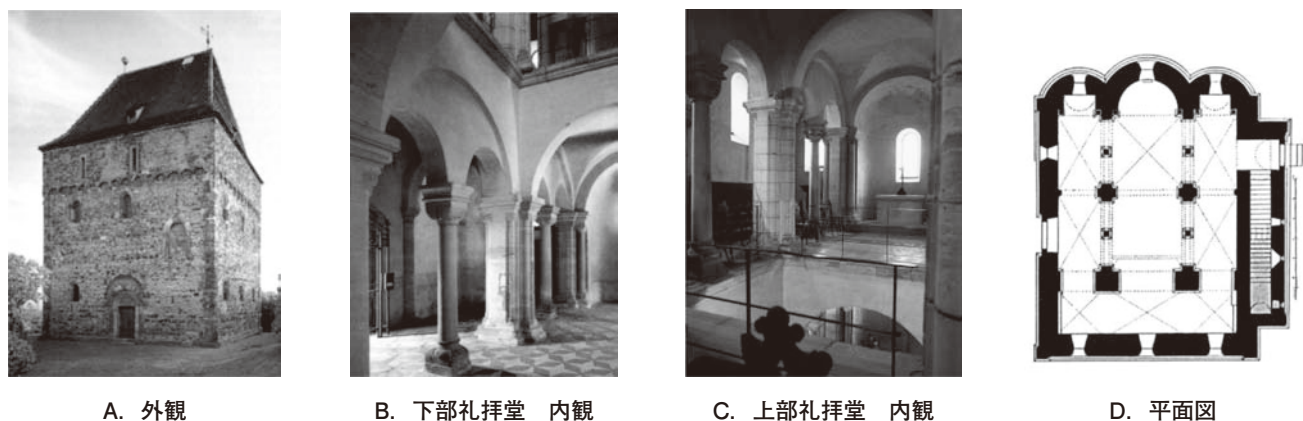


図2 ランツベルク城の二重礼拝堂，12世紀末

とすることでスペースを節約するという意味もあったと思われる。このような二重礼拝堂は、戦争によって破壊されてしまうことが多く、これまでに多数の作例が失われたと考えられる。平和な時には、領主も領民も城下の聖堂を利用することが多かったであろう。しかし、いざ戦争となると、山上の城に籠もらざるを得ない時もある。戦時において、城内の限られた空間で様々な用途に用いられたのが二重礼拝堂である。籠城戦が展開された場合、

城内でミサを行い、告解をする場が必要となる。子供が生まれれば洗礼の場が必要となったであろう。領主や兵士が亡くなれば、葬儀を行う空間、遺体を安置する場所が必要とされる。城塞付属の二重礼拝堂では、上下二層の建築において、これらの機能を全て満たすことが求められた。

ランツベルクの場合、全体は正方形に近い矩形のプランをなし、東部に3つの祭室が突き出している。内部で

は、中央部を4本のピアが支え、矩形の開口部が上下の空間を結びつける働きをしている。宮殿や城郭に二重礼拝堂が付属していることにより、王や領主は、そこで洗礼を受け、告解を行い、ミサに参列できるという特権を享受することができた。さらには、自らの霊廟として利用することも可能であった。二重礼拝堂の2階部分は私的礼拝堂 (capella privata) として供され、1階は公的礼拝堂 (capella publica) として用いられた¹²⁾。二重礼拝堂には上下の層を結びつける開口部を持つものがあるが、これにより、領主は2階に居ながら1階で行われる典礼に臨むことができた¹³⁾。ランツベルクの二重礼拝堂の外観は、13世紀の初めに建設されたノイエンプルク城付属の二重礼拝堂¹⁴⁾と共通する量塊的な壁体特徴的であるが、いずれも下部礼拝堂は窓が小さく、意図的に内部空間を暗くし、1階部分に地下聖堂のような雰囲気を与えたのだと思われる。つまり、下部礼拝堂には霊廟空間としての性格が強く表れている。死後の世界、地下界の空間表象と結びつき、下部礼拝堂は岩窟の如くに暗く、石造のヴォールト天井による重々しい雰囲気が造られた。アーヘンの宮廷礼拝堂の場合、下部礼拝堂にはカール大帝の石棺が安置され、パリのサント・シャペルでは、下部礼拝堂は聖遺物を安置するための空間である。つまり、いずれも下部は霊廟空間だと言える。

筆者独自の類型化を試みる前に、二重礼拝堂について包括的に論じた先行研究をまとめ、その上で新たな分類方法を提示したい。このテーマに関しては、1929年に出版されたオスカー・シュレーラーの『ロマネスクの二重礼拝堂』¹⁵⁾、ギュンター・バントマンの論考「二重礼拝堂」(ドイツ美術史事典所収、1955年)¹⁶⁾が最も重要だと言える。また、比較的新しいものでは、1989-90年に発表されたエルンスト・パートステューブナーの論文がある¹⁷⁾。

シュレーラーの定義によれば、二重礼拝堂とは「おのおの固有の祭壇と通路を持つ、1つの開口部によって互いに結ばれ、互いに積み重ねられた2つの礼拝堂空間」ということになり、パリのサント・シャペルなど、開口部を持たないタイプは除外されている¹⁸⁾。そのため、フランスの二重礼拝堂を含め、二重礼拝堂について包括的に論じることができない。

本稿では1955年のバントマンの研究に基づき、広義の二重礼拝堂としてアーヘンの宮廷礼拝堂なども考察の対象に加える、という立場を採りたい。バントマンはさらに、二重礼拝堂と関連付けられる建築として、聖墳墓

教会の複製建築、洗礼堂、西構え (ヴェストヴェルク) を挙げている¹⁹⁾。また、バントマンが指摘した作例の平面型は、すべて古代末期の霊廟 (マウソレウム)、初期キリスト教時代の殉教者記念堂 (マルティリウム) のプランに遡ることができると論じている²⁰⁾。

そこで、筆者は、バントマンの研究に基づいて二重礼拝堂を一旦2つのタイプに分類し、その上で筆者独自の見解に基づいて第三のタイプを加え、新たに類型化することで全体像を明らかにする。そして、次章以降、本稿において中心的に扱うシュパイヤーの二重礼拝堂に歴史的定位を与え、空間のシンボリズムを読み解くことを試みる。

バントマンは二重礼拝堂を「開口部の有無」によって2つのタイプに分けた²¹⁾。上下の空間を結ぶ開口部がある「タイプA」は、ライン川流域とドイツのザクセン地方に遺構が多く、アーヘンの宮廷礼拝堂、ゴスラーのザンクト・ウルリヒ礼拝堂、ランツベルクの二重礼拝堂の他、マインツ、シュヴァルツラインドルフ、ニュルンベルクの二重礼拝堂が例として挙げられる。タイプAの二重礼拝堂は、平面が正方形、多角形、円形、十字形、長方形などの種類に分けられる。先述したランツベルクの作例と同様、ニュルンベルクの二重礼拝堂の場合は矩形プランと矩形の開口部の組み合わせで、開口部の直下には石棺が埋め込まれ、下部礼拝堂が埋葬場所として利用された様子を示している。開口部を持たないタイプ、バントマンの言う「タイプB」は、パリのサント・シャペルによって代表され、主にイル・ド・フランスに分布している。

以上のような先行研究の成果を踏まえ、以下、筆者による新たな類型化を試みる。「タイプA」をさらに2つに分けることによって、AとBの「融合型」である第3の建築群がライン川流域における二重礼拝堂の発展型であることを明らかにする。上部礼拝堂と下部礼拝堂を結びつける「開口部」の有無だけでなく、平面型にも注目して考察したい。「東方形 (タイプAの一部)」の二重礼拝堂はプランが円形、正八角形などの集中式であるが、「融合型 (タイプAの残りの建築群)」は「西方型 (タイプB)」のプランを受け継いで矩形プラン (初期は正方形プラン) を採用している。しかし、開口部はタイプAの建築群に由来している。二重礼拝堂を以下の3つのタイプに分類することによって、筆者は、この建築に特殊な政治的機能が備わっていたという仮説を提示し、二重礼拝堂の系譜を明らかにしていく。

2.2. 東方型二重礼拝堂

円形もしくは正八角形のプラン（稀に正十二角形）で中央に吹き抜け空間、開口部を有するものを、本稿では、二重礼拝堂の「東方タイプ」と呼ぶこととする。その起源はシリア・パレスティナの集中式建築であると推察され、ラヴェンナなどに建設されたビザンティン建築を介してアルプス以北へと伝播したのだと考えられる。エルサレムの聖墳墓教会、アナスタシス・ロトンダの複製建築²²⁾は、必ずしも二重礼拝堂という訳ではない。しかし、聖墳墓教会の円形堂を模した建築は、周歩廊の階上にギャラリーを持つものが多く、ギャラリー層に祭壇を配し、独立した礼拝堂としての機能を持たせたものがある。これは広義の二重礼拝堂と言うことができ、バントマンは、アルメンノ・サン・バルトロメオのサン・トメ円形堂、マントヴァのサン・ロレンツォ円形堂などを例に挙げている。本項では11世紀における聖墳墓教会の典型的な複製建築を紹介し、これが東方タイプの原型となったことを指摘したい。

フランスのヌーヴィ＝サン＝セピュルクル聖堂²³⁾は、プランは円形で、中央部に円形の開口部があり、ドームを戴く吹き抜け空間となっている。下から順に、周歩廊、環状ギャラリー、クリアストーリー（高窓層）、ドームを垂直に積み重ねており、水平方向に分節された四層構成である。アルメンノ・サン・バルトロメオのサン・トメ円形堂²⁴⁾も、内部は多層構成で、周歩廊の上にギャラリーがあり、中央の吹き抜け空間が上部にドームを戴

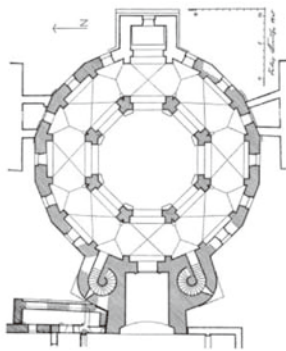
いているのが特徴である。同じく、11世紀、マントヴァのサン・ロレンツォ円形堂²⁵⁾も内部は四層構成で、階上のギャラリーは半独立の典礼空間となっている。

エルサレムの聖墳墓教会、アナスタシス・ロトンダは、11世紀初頭にファーティマ朝のカリフによって破壊された。しかし、ロマネスク期には多数の複製建築が作られ、その遺構が西欧に広く分布している。フランク王国の領内にも、カロリング朝時代に遡るフルダのザクト・ミヒヤエル聖堂があり、初期中世において既にこの建築形式が伝播してきていたのは明らかである²⁶⁾。

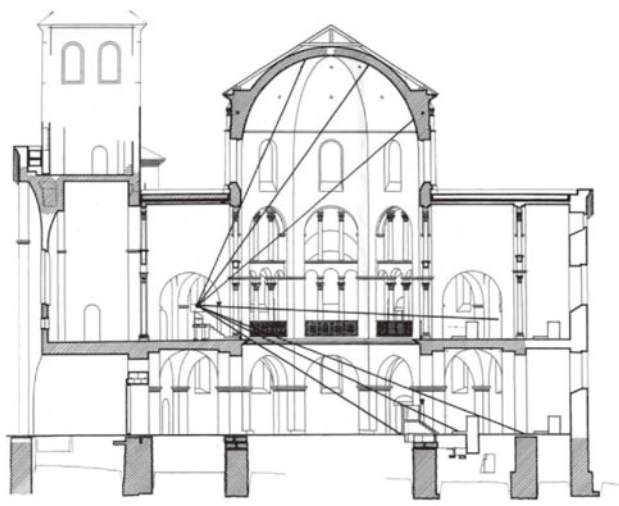
8世紀末、カール大帝とその時代の建築家は、アーヘンの宮廷礼拝堂（図3）において、このタイプの空間構成を採用した。バントマンによれば、アーヘンの宮廷礼拝堂も広義の二重礼拝堂に位置付けることができ、ライン川流域の二重礼拝堂の系譜に大きな影響を与えたものと推察される²⁷⁾。アーヘンの宮廷礼拝堂は、カール大帝廟としての性格が強いため、このような霊廟建築を想起させる空間構成を用いたのだと思われる。核となる部分は集中式プランでありながら、アーヘンの宮廷礼拝堂では、皇帝関連施設の伝統である参道形式が採用され、西から東へと至る水平方向の軸線が設定されている。西から、アトリウム、西構え、八角堂の順に連なり、これと直交する南北の軸線上に付属の建築が配され、礼拝堂の北側にあった宮殿と渡り廊下で結びつけられていた。ラヴェンナのサン・ヴィターレを模したとも言われる、この集中式の建物は、周歩廊、二段に重ねたコリント式円柱によって分節されるギャラリー層、さらにクリアス



A. 内観



B. 地階復元平面図



C. 復元断面図

図3 アーヘンの宮廷礼拝堂、8世紀末-9世紀初頭

トリー層、ドームが垂直軸に沿って積み上げられ、聖墳墓教会のロトンドを想起させる霊廟建築の多層構成を特徴としている。同時に、バシリカ式聖堂を想起させる東西の軸線も設定され、上部のギャラリー層には救世主に捧げられた祭壇が置かれ、独立した礼拝堂（上部礼拝堂）として機能していた。上部礼拝堂（階上ギャラリー）の西側にはカール大帝の玉座があり、下部礼拝堂に置かれた主祭壇を見下ろす位置を占めている（図3-C）。つまり、西構えが一際高く聳える西側はキリスト教の守護者としての皇帝を象徴し、これを救世主のイメージに重ねているのだと推察される。そして主祭壇のある東に向かい、皇帝は、階下の家臣を見下ろすかたちでミサに参列した。宮殿付属の二重礼拝堂としての機能を有するアーヘンの宮廷礼拝堂では、フランク族の伝統に倣い、下部礼拝堂はカール大帝の霊廟と見なされていた。石棺は安置場所が変わってしまうことが多く、最初の置き場所は明らかではないが、西構えの地階、玉座の真下だったのではないかと考えられている²⁸⁾。このように、アーヘンの宮廷礼拝堂は、アルプス以北における東方タイプの二重礼拝堂の最初期の作例であり、カール大帝崇敬とともにその建築形式が広まった、と考えられる。

2.3. 西方型二重礼拝堂

開口部を持たない「西方タイプ（バントマンの論考におけるタイプB）」の二重礼拝堂は、パリのサント・シャペル（図4）によって代表され、フランスに多く分布している。バントマンはパリ以外に、ラン（図5）、ランス、ノワイヨン²⁹⁾の二重礼拝堂を例として挙げた。これら二重礼拝堂の「西方タイプ」は、ほぼ同様の空間構成と

なっているので、本項ではパリの作例に絞って言及する。

パリの王宮礼拝堂であるサント・シャペルは、下部礼拝堂が天井の低い三廊式、上部礼拝堂はステンドグラスが特徴的な単廊式である。西方型の二重礼拝堂は長方形平面であることが多く、12世紀後半以降のフランス北部に多く見られるが、起源はフランク王国の城塞、あるいは宮殿の付属礼拝堂であったと思われる、メロヴィング朝時代にまで遡る可能性が指摘できる。ゲルマン諸部族、とりわけフランク族の城、宮殿では、基本的に長方形の平面が採用されていた。したがって、付属の建築である二重礼拝堂も矩形プランを採用した方が接続しやすい。矩形プランの二重礼拝堂は、限られたスペースで効率的に空間を構成することが可能な形式であると言えるだろう。筆者は、これが西方起源、すなわちゲルマンの建築伝統であるアウラ・レギア（王の広間）のような宮殿・城郭建築の主空間が起源であったと考え、バントマンの分類によるタイプBを二重礼拝堂の「西方タイプ」と呼ぶこととする。二重礼拝堂の西方タイプは、矩形平面を採用し、上下の空間をつなぐ開口部を持たない形式であり、ゲルマンの古い建築伝統に基づくものだと考えられる。

2.4. 融合型二重礼拝堂

二重礼拝堂の第三の形式は、長方形平面（または正方形平面）の二重礼拝堂に上下の礼拝堂を結びつける開口部を設けたものである。筆者は、これを「融合タイプ」と名付ける。元来、西欧における二重礼拝堂の平面型は、矩形プランの宮殿、城郭と接続しやすい長方形平面であったと考えられる。しかし、アーヘンの宮廷礼拝堂が

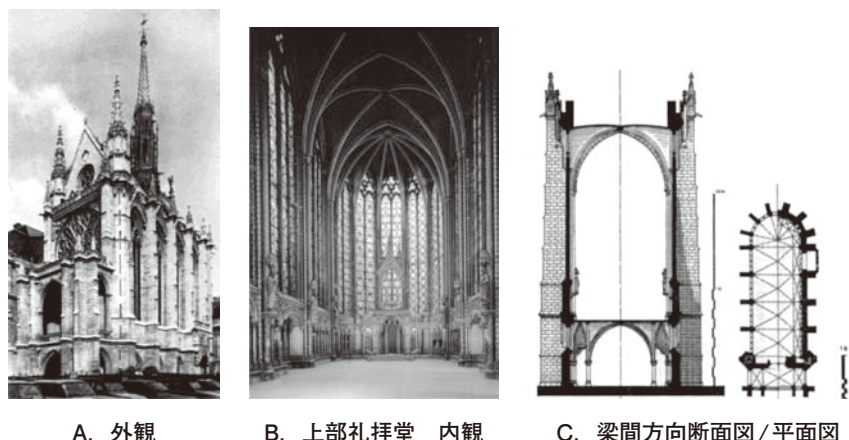


図4 パリのサント・シャペル（王宮付属二重礼拝堂）、13世紀中頃

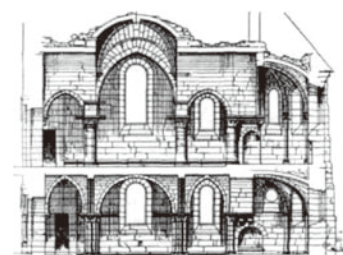


図5 ランの二重礼拝堂、12世紀後半桁行方向断面図

東方タイプの空間構成を採用した結果、その影響を受け、開口部を設けるようになったのだと推察される。最初期の作例の一つとして、シュパイヤーの二重礼拝堂（図1）が挙げられるが、この作例の存在は20世紀後半まで知られていなかったため、二重礼拝堂の「融合タイプ」の成立時期や空間シンボリズムについてはこれまで論じられることがなかった。融合型二重礼拝堂の外観は、矩形プランか正方形プランの上に壁体を立ち上げるため、西方タイプとほとんど見分けがつかない。世俗の城郭建築、宮殿建築の視覚的印象を留めている。宮殿や城館は矩形の平面を基本とし、水平方向に展開して左右相称の構成となるのが通例である。この場合、付属の礼拝堂としては、同じく矩形プランである方が配置の点で有利であると言えるだろう。円形プランの建築は、際だった印象を与え、他の施設とのバランスがとりにくいという問題がある。そこで、融合タイプでは、外観は西方タイプの建築伝統を受け継ぎ、他の建築と調和させ、内部においては東方タイプから引用した開口部、吹き抜け空間を設け、霊廟建築としての記念碑性を表したのだと推察される。

3. シュパイヤーの二重礼拝堂

3.1. 問題の所在

本章では、第2章で提示した二重礼拝堂の新たな分類方法に基づき、シュパイヤーの二重礼拝堂をアーヘンからシュヴァルツラインドルフに至る二重礼拝堂の系譜の中に位置付ける。筆者は、シュパイヤー大聖堂が典礼用の司教座教会堂としての機能を有するだけでなく、皇帝の葬祭用空間、すなわち皇帝霊廟（マウソレウム）を兼ねており、それゆえ典礼空間と霊廟空間の二重の象徴体系を有するのだと考えている³⁰⁾。では、その付属礼拝堂にはどのような機能、どのような象徴的意味があるのだろうか。

シュパイヤー大聖堂には、現存する付属施設として、二重礼拝堂、聖アフラ礼拝堂、聖具室の3つがある。それらのうち、南東側階段塔とアプシスに接する聖具室はゴシック期の増築部分であり、聖具の保管場所、という用途がはっきりしている。聖アフラ礼拝堂は一層のみの建築で、聖遺物を保管するために建設された。しかし、二重礼拝堂に関しては、未だその用途が明らかでなく、現在は洗礼室や聖遺物の保管場所として転用されている。だが、洗礼用の空間や聖遺物の保管場所は、隣接す

る大聖堂にもあり、元来の建設目的であったとは考え難い。ハインリヒ4世とベンノーは、なにゆえ大聖堂に隣接する二重礼拝堂を建設したのだろうか。城塞や宮殿の付属礼拝堂としてではなく、大聖堂に隣接する融合型の二重礼拝堂が建てられたのは、筆者が知る限り、シュパイヤーの二重礼拝堂が最初の例である。

シューラーやバントマンによる先行研究では、シュパイヤーの二重礼拝堂についての言及はない。先述のように、クーバッハ等による修復・調査³¹⁾が行われるまでは洗礼用空間として扱われ、二重礼拝堂であることが理解されていなかったためだと考えられる。シュパイヤーの二重礼拝堂は後世の改変が著しく、久しく原形がわからなかったが、1950年代になって八角形の開口部が上部礼拝堂の床下から発見され、二重礼拝堂であることが明らかになった³²⁾。

ハンス・エリッヒ・クーバッハ等の調査・研究によれば、1081年頃、シュパイヤー大聖堂の建築家ベンノー・フォン・オスナブリュックは、後陣の東側のベイとアプシスを改築し、同時に二重礼拝堂の建設を始めた。しかし、後者はベンノーの存命中には完成せず、1097年以降、後継の建築家オットー・フォン・バンベルクによって完成されたと考えられている。したがって、下部礼拝堂が1081年頃から1088年、上部礼拝堂は1097年から1102年頃に位置付けられる³³⁾。この建築は、ゴシック期に回廊の一部として組み込まれ、大幅な改変を受けたために保存状態は良くない。西側と南側の外壁は14世紀ないし15世紀に取り壊され、修道院への玄関間として使われていた³⁴⁾。現在の外壁は、修道院施設の破壊後、1820年に補われたものであるが、幸い下部礼拝堂の内部空間は、ほぼ建設当初のままの姿で残されている。

3.2. ディスクリプション

本項では、シュパイヤーの二重礼拝堂について、詳しいディスクリプションを試み、問題点を明らかにしたい。

シュパイヤーの作例では、下部礼拝堂は聖マルティヌス（St. Martin）と聖エメラム（St. Emmeram）に捧げられたもので、先行する建築物を取り壊して建設された。プランは正方形で、中央にコリント式円柱を4本配し、全体を9つの正方形に分け、中央の正方形区画を吹き抜けにし、残りの8つの区画には水平頂線の交差ヴォールトを架構している。東側の壁面に3つの壁龕を設け、中央の壁龕には祭壇が置かれている。これらの壁龕は切石

を積んだ半円アーチで縁取られ、壁面は漆喰で仕上げられている。それぞれの正方形区画はアーチで結ばれ、はっきりと分節されている。北側の壁面にはベンチが作りつけられた。上階に通ずる八角形の開口部は1820年に埋め込まれてしまったが、1959年になって元に戻された。下部礼拝堂にはもともと窓はなかったか、あるいはあっても小さいものであったと考えられ、採光はほとんど八角形の開口部から行われており、モニュメンタルな空間構成が特徴的である。上部礼拝堂は先行する建築の3つの柱頭を再利用して建設されたもので、聖カタリーナ (St. Katharina) に捧げられている。ロマネスク期の聖カタリーナ礼拝堂は現存しないが、D. v. ヴィンターフェルトによる復元的研究³⁵⁾の結果、中央の正方形区画に小型のドームを戴き、高窓から採光していたと考えられている (図1-E)。その他の8つの区画は、下部礼拝堂と同様、ヴォールト架構となっていた。ただし、ヴィンターフェルトは上部のヴォールトをドーム状交差ヴォールト³⁶⁾であったと考えている。柱頭は同じくコリント式であったと推察される。つまり、シュパイヤーの二重礼拝堂は、プランは西方タイプであるが、中央部の吹き抜け空間は東方タイプのものを継承しているのである。

もう一つの付属礼拝堂である聖アフラ礼拝堂 (St. Afra) は、シュパイヤー大聖堂における様式展開の最終的局面を示している部分であり、二重礼拝堂の下部礼拝堂より後に建設された。この小規模な礼拝堂は1097年頃³⁷⁾、ハインリヒ4世が聖アフラの聖遺物を入手したことを記念して建設されたもので、1106年には完成していたと考えられている。二重礼拝堂の建設意図が不明であるのに対し、こちらは用途がはっきりしている。

当時の記録である『オットー伝 (Vita Ottonis)』によれば、シュパイヤー大聖堂の建設は莫大な予算を必要とし、国庫を傾けての大事業であった³⁸⁾。無駄なものを作る余裕などなかったはずである。では、問題の二重礼拝堂は一体何の目的で建設されたのだろうか。もう一つの問題として、建設の順序に不可解な点がある。シュパイヤーの二重礼拝堂は、ハインリヒ4世による大聖堂建設工事の最初の段階で開始されている。しかし、付属の施設を最初に作り始めるというのは異例であろう。ベンノーは、大聖堂本体の建設工事を急いでいたにもかかわらず、付属の二重礼拝堂を最初に着工した。それほど重要な施設であるならば、その後、使われた形跡がないのは極めて不自然である。

3.3. ハインリヒ4世と二重礼拝堂の建設

シュパイヤーの二重礼拝堂について、その建設目的と政治上の機能について、筆者の結論を先に述べ、その上で検証作業に入りたい。

本稿において、筆者は、シュパイヤーの二重礼拝堂がハインリヒ4世の「仮の墓所」として計画されたものではないか、という仮説を提示する。二重礼拝堂には元来、霊廟建築としての属性があり、仮埋葬の場所として、それにふさわしい空間構成を示していたと言える。しかし、現代人の視点からは、このような立論は不自然に思われるかもしれない。なぜなら、ハインリヒ4世は事実として、現在、大聖堂の中心部にある皇帝墓所に埋葬されているからである。しかし、クーバッハやヴェルナーによれば、ハインリヒ4世が大聖堂に葬られたのは、1111年のボンテ・マンモーロ条約後のことである。1106年に没した後、1111年までの間、ハインリヒ4世の棺はまだ聖別されていなかった聖アフラ礼拝堂に安置されていた。その後、ハインリヒ5世は先帝の破門が解かれた後、その遺骸を皇帝墓所に改葬したのである³⁹⁾。

このことから、当時、破門がいかなる意味を持っていたかがわかる。破門されたキリスト教徒は、たとえそれが王や皇帝であっても教会内での葬祭を行うことができない。ハインリヒ4世は、生前であろうと死後であろうと、教皇からの破門を解かれぬ限り、大聖堂内部の皇帝墓所を自らの霊廟と定めることができなかったのである。

ハインリヒ4世に対する最初の破門は、1076年に行われた。1077年、「カノッサの屈辱」と呼び慣わされるハインリヒ4世の贖罪によって、破門はひとたび解かれたが、反皇帝派の諸侯は納得せず、対立国王をたてて反乱を起こした。だが、1080年、エルスターの戦いで対立国王ルードルフは重傷を負い、その年に没した。このことに神の裁きを見出した同時代人の世論を得て、ハインリヒ4世は形勢を逆転し、ブリクセンの公会議で対立教皇クレメンス3世を選出した。これに対抗し、グレゴリウス7世はローマの四旬節公会議において再びハインリヒ4世を破門したが、ドイツと北イタリアの諸侯、司教の多くはハインリヒ4世の側に立ち、1081年、ハインリヒ4世に率いられた神聖ローマ帝国軍はローマへ向かって出兵した。その直前、ハインリヒ4世は、側近のベンノー司教をシュパイヤーに呼び寄せ、シュパイヤー大聖堂の建設工事を担当させている⁴⁰⁾。こうした緊迫

した状況下で、ハインリヒ3世の急逝以来停滞していたシュパイヤー大聖堂の建設工事は再開され、同時に二重礼拝堂の建設が始まったのである。

ここで、イタリア出兵を控えたハインリヒ4世を取り巻く状況を考えてみたい。まず、イタリアへ出陣すれば、ハインリヒ4世には必然的に戦死の可能性が生じる。しかし、万が一戦陣にて没した場合、その遺体は皇帝墓所への埋葬を禁じられている。破門され、皇帝戴冠を拒まれていたからである。しかし、ゲルマン人の伝統的建築であり、フランク族の諸王がしばしば自らの霊廟として建設した二重礼拝堂ならば、聖別さえしなければ世俗の私的な建築であり、皇帝や王の私有財産と見做される。破門されたハインリヒ4世の埋葬が宗教上の問題となることはなかったであろう。皇帝が大聖堂に隣接する霊廟建築に埋葬された例として、ローマのサン・ピエトロ旧聖堂と隣接する円形の皇帝廟の例がある。つまり、できる限り聖遺物に近いところに葬られることによって、死後の救済を求めたのではないだろうか。シュパイヤー大聖堂の二重礼拝堂も、こうした王家の墓所の伝統を考慮して計画された可能性が指摘できる。

しかし、1084年、ハインリヒ4世が教皇側の勢力に勝利し、グレゴリウス7世をローマから追い払うに至り、状況は一変した。サン・ピエトロ大聖堂において対立教皇クレメンス3世から皇帝の冠を受け、ハインリヒの破門は一旦解かれたからである。この時点でハインリヒは皇帝墓所に埋葬される資格を取り戻し、戦死の可能性もほぼ回避されたと考えられる。二重礼拝堂がハインリヒの埋葬場所として想定されたものならば、その建設目的を失ったことになるのではないだろうか。しかし、対立する教皇からの再度の破門は解除されないまま、皇帝は1106年に陣没した。これは息子であるハインリヒ5世が先帝を皇帝墓所に埋葬しなかった理由となり得る。ハインリヒ5世は、1106年、ハインリヒ4世の棺を一旦未聖別のアフラ礼拝堂に安置した⁴¹⁾。聖遺物に近いところを選んだからか、あるいは二重礼拝堂が既に聖別されていたため、破門された者は葬れないと判断したためだと推察される。

こうした経緯により、シュパイヤーの二重礼拝堂は、結局ザリアー朝時代には霊廟として使われないまま残された。1957年から1972年の修復時に二重礼拝堂の床下からは複数の石棺が出土しているが、これは下部礼拝堂が埋葬空間であると認識されていたことの証左であり、ハインリヒ4世が結局埋葬されずに空いていたため、聖

職者の墓所として転用されたのだと考えられる。

以上のような筆者の仮説は、二重礼拝堂が霊廟建築の系譜に属するものだという見解に基づいている。そこで自説の妥当性を高めるため、まず、古代以来の霊廟建築の造形原理について整理し、その上で、二重礼拝堂の霊廟建築として属性について論じたい。これによって、シュパイヤーの二重礼拝堂と後続の作例であるマインツ、およびシュヴァルツラインドルフの二重礼拝堂との密接な関連性を指摘することができる。

4. 霊廟建築の造形原理

4.1. 古代ローマのマウソレウム

霊廟建築はいかなる造形原理に基づいて建設されたのだろうか。ギーディオンの著作を参照しつつ、その起源に立ち返って考えてみたい⁴²⁾。

古代ローマ人が独自の霊廟建築を発展させる上で基礎としたのはエトルリア人の墳墓「トゥムルス（円墳）」であった。チェルヴェテリ、バンディタッチアのネクロポリスがその典型であり、円形プランの外周に止土壁を巡らせて土盛りをし、巨大な墓丘が形成された。内部を生前と同じ居住空間として再現しているが、必ずしも左右相称ではない。古代ローマでは、この形式を引き継ぎ、皇帝の「マウソレウム（霊廟）」が建設された。外観はまさしくトゥムルスに他ならないが、同心円上に平面配置を行い、中心軸を幾重にも取り巻く環状壁があることがエトルリアのトゥムルスとは異なる点である。ローマには、初代ローマ皇帝アウグストゥスのマウソレウムがあり、紀元前1世紀に建設された最初期の作例として知られている。古代ローマの霊廟建築に影響を与えたもう一つの建築伝統は、円形建築、すなわち「トロス（円形プランの地下墓所もしくは円形堂）」である。ギーディオンは、これを紀元前3千年紀におけるウルの王室墓地の地下墓室から紀元前14・13世紀におけるミュケナイの王室墓所へと継承されたものと見ている。ミュケナイのアトレウスの宝庫が最も典型的なドーム式トロス墓である。丘の斜面を切り開いて作った羨道は、両側を石材で支えて天井を作らず、上方に解放された「明」の空間となる。しかし、入口より一歩内部にはいると、内部は一転して「暗」の空間となり、高さ13.2メートルの尖頭鐘形の持送りヴォールトが主空間を形成し、これに付属墓室がつく形式となっている。トロスは霊廟だけでな

く、神殿などにも用いられた。古代ギリシアでは円形プランの建築に、環状の円柱列を巡らせるようになる。ローマに建設されたハドリアヌス帝のマウソレウム（現在のサンタンジェロ城）には環状円柱列があったと考えられており、古代ローマがトロスから円柱列を抽出し、トゥムルス式マウソレウムに付け加えたことがわかる。この建築要素は、ラヴェンナのテオドリクス廟など、中世ヨーロッパの霊廟建築に引き継がれた。このように、トゥムルス式墳墓とトロスを融合したものが、マウソレウムの第一の建築形式である。

しかし、トゥムルス式の墳墓は水平方向に広がる構成のため、広大な土地を必要とする。そのため、皇帝・皇族以外のローマ人は、規模が小さくとも記念碑性の高い別の建築形式を必要とした。古代ギリシアの記念碑には、正方形プランの台座の上に細身のトロスを掲げたものがあり、これが第二の形式として採用された。このタイプの墳墓では、諸要素が中央の垂直軸に支配され、鉛直方向に積み上げられているのが特徴である。このようなタワー型のマウソレウムは、ミュンヘン、バイエルン国立博物館の象牙版など、「キリストの墓を訪れる聖女たち」の場面において、「キリストの墓」として繰り返し描かれた⁴³⁾。

古代ローマの霊廟建築における第三のタイプは、4世紀頃（初期キリスト教時代）に現れた。ローマのパンテオンのように、内部空間を重視した円形堂である。これは、キリスト教が公認され、殉教者を祀る必要が出てきたためだと考えられる。トゥムルス式やタワー型の霊廟は、外観を重視しており、内部に立ち入ることは稀であった。そのため、円形プランに広大な内部空間を立ち上げるロトンダ（円形堂）が新たに霊廟空間として採用されたのである。初期の例として、ローマのサンタ・コスタンツァ廟がある。キリストの墓である聖墳墓教会のアナスタシス・ロトンダもこの形式で建てられた。エルサレムでは周歩廊の階上に環状のギャラリーが付け加えられ、キリストの墓と周歩廊、階上の環状ギャラリー、クリアストーリー、ドーム、の四層構成になっている。

4.2. 中世ヨーロッパの納骨堂

複数の起源を持つ地中海地域の霊廟建築の伝統は、やがて中世ヨーロッパの霊廟建築の多様化をもたらした。二重礼拝堂と霊廟建築との関わりは、教会内埋葬の一般化と聖遺物崇敬の伝播によって強められ、二重礼拝堂は

中世人にとって埋葬用建築の一形式として位置付けられていたと考えられる。その証左は、より純粋な埋葬用建築である納骨堂（Beinhaus）において、二重礼拝堂の建築形式が転用されていることである⁴⁴⁾。納骨堂の作例の中には、二重礼拝堂の複製建築が存在し、15世紀のヴェルトハイム・アム・マインの納骨堂（図6）などは、西方タイプの二重礼拝堂そのものである。その他、融合タイプの作例も現存し、中世において二重礼拝堂が「霊廟」としての象徴的意味を担い、納骨堂の建築形式として転用されていたことは明らかである。納骨堂、という一群の建築は、規模が小さく、独創的な建築作品も少ないために一般の注目度は低い。だが、納骨堂建築は「墳墓」として単一の目的のもとに建設されており、創造性や関心の低さ故、逆に当時の埋葬用建築の伝統をより純粋なかたちで保存している点で注目される。

以下、中世ヨーロッパの納骨堂の4タイプを挙げることで、中世の人々が霊廟建築のイコノグラフィーを受容し、二重礼拝堂を霊廟建築のカテゴリーに加えていたことを確認する。まず、第一のタイプは古代のタワー型マウソレウムの流れを汲むものである。ドーバーンの納骨堂（図7）がその典型だと言えるだろう。第二のタイプに属するオーストリア、ドイチュ＝アルテンブルクの納骨堂（図8）は、ロトンダ型マウソレウムの簡略化された形式を示している。そして、第三のタイプは洗礼堂の建築形式を転用したものである。同じくオーストリア、トゥルンの納骨堂（図9）は八角堂型式の洗礼堂と外見上見分けがつかない。このように、納骨堂建築は、それ以前の霊廟建築の建築形式をそのまま用いていることが明らかである。したがって、他の3つのタイプと並列の関係にある二重礼拝堂タイプの納骨堂（図6）は、15世紀のドイツにおいて、当時の建築家が二重礼拝堂に霊廟建築の象徴的意味を読みとっていたことの何よりの証拠



図6 ヴェルトハイム・アム・マインの納骨堂、15世紀



図7 ドーベランの納骨堂, 13世紀



図8 ドイチュ＝アルテンブルクの納骨堂, 13世紀



図9 トウルンの納骨堂, 13世紀

である。古代のトロスやマウソレウムを霊廟建築の流れの「源流」に喩えるなら、納骨堂建築は芸術性、創造性、建設年代、いずれの意味においても「下流域」に位置している。建築図像学的展開が硬化した下流にあり、純粋な霊廟建築である納骨堂は、霊廟建築のイコノグラフィにおいて最も有力な物的証拠として注目すべきである。

以上の考察によって、二重礼拝堂は霊廟建築としての属性を有していたと結論付けられる。

5. ライン川流域の二重礼拝堂と皇帝権

5.1. マインツの二重礼拝堂

シュパイヤーの二重礼拝堂が礼拝を目的とした教会建築であるだけでなく、「霊廟建築」でもあったことを裏付ける建築を2例挙げる。ライン川流域では、シュパイヤーの作例以後、二重礼拝堂の多くが霊廟として建設された。マインツのゴードハルト礼拝堂 (St. Godehard) とシュヴァルツラインドルフの二重聖堂は、いずれも王家の側近を埋葬した霊廟建築であり、二重礼拝堂である。フェアベークはマインツとシュヴァルツラインドルフの作例の密接な影響関係について論じている⁴⁵⁾。

マインツのゴードハルト礼拝堂 (図10) は、矩形プラン (内部は正方形プラン) の二重礼拝堂であり、矩形の開口部を持つ融合タイプの作例である。ロタール3世の宰相、アーダルベルト大司教の霊廟であり、その石棺が安置された。マインツの大司教は帝国宰相を兼ねることが多く、この街はザリアー朝皇帝権を支える勢力のひとつであり、シュパイヤーとの関係性を強く示唆している。

元来、宮殿や城塞の付属施設であった二重礼拝堂が、司教座聖堂であるシュパイヤー大聖堂やマインツ大聖堂に隣接して建設されたのはなぜか。シュパイヤー大聖堂に関しては、ザクセン反乱によってハインリヒ4世がゴスラーの皇帝宮殿を追われて後、シュパイヤーが最も重要な政治的拠点となったためだと言えるだろう。ハインリヒ4世は、シュパイヤーの地に広大な宮殿を造営する代わりに、大聖堂の完成と二重礼拝堂の建設を命じた。その時、シュパイヤー大聖堂の「西構え (Westwerk)」は既に使える状態にあったと考えられ、ハインリヒ4世が西構えの階上、「皇帝の間」で政務を執り行った可能性が指摘できる。西構えはカロリング朝建築から引き継がれた建築伝統であり、大聖堂の西構え2階部分には玉座が置かれ、皇帝の行幸の際に使用された。フランク族の王は一カ所に居所を定めず、家臣を連れて各都市を巡回し、移動しながら政治を行った。全ての都市に宮殿が造営されたわけではなく、大聖堂や大修道院がある場合、聖堂建築の西構えなどを皇帝謁見の間として用いたと考えられている。それゆえ、西構えなどに関連し、皇帝用の付属施設として、大聖堂付属の二重礼拝堂が建てられたのだと推察される。マインツの二重礼拝堂もシュパイヤーとはほぼ同じ平面配置を示し、皇帝関連施設の伝統に



図10 マインツの二重礼拝堂，12世紀前半

倣ったものとも言えるだろう。また、マインツの二重礼拝堂の外観を特徴付ける小型ギャラリーは、シュパイヤー大聖堂の影響を受けたものと考えられ、これも霊廟建築としての象徴的意味に関わるものだと推察される。

5.2. シュヴァルツラインドルフの二重礼拝堂

次に、シュヴァルツラインドルフの二重礼拝堂⁴⁶⁾について考察する(図11)。現在は増築によって身廊部が付け足され、二重聖堂となっているが、1151年の建設当初は二重礼拝堂であった。献堂式の記録⁴⁷⁾により、下部礼拝堂には東西南北それぞれに祭壇が置かれていたことがわかる。東側が西と南北より長く一応の優位を保っていたとはいえ、4つの祭壇がほぼ拮抗する集中式のプランであった。プランはギリシア十字形に近く、十字形の中央部には八角形の開口部があり、上下の空間が結びつけられている。内部空間には全面的に交差ヴォールトが架構され、それぞれにエゼキエル書の諸場面がフレスコ技法で描かれている。西側の祭壇前には、ドイツ国王コンラート3世の宰相、アルノルト・フォン・ヴィートの石棺が置かれていた。シュヴァルツラインドルフの建設当初のプランであるギリシア十字形について、フェアベークは比較作例として、ラヴェンナのガッラ・プラチディア廟を取り上げている⁴⁸⁾。筆者もその影響関係は十分に考慮すべきだと考えるが、むしろ、直前に建てられたゴスラーのザンクト・ウルリヒ二重礼拝堂を重視すべきだと考える。両者ともにギリシア十字形のプランの交差部に開口部を有する点、複数のニッチ(壁龕)を有する点、宮殿や城館の付属施設である点、開口部の上にドームが配されている点で共通している。ただし、シュヴァルツラインドルフでは上部礼拝堂もギリシア十字形

のプランを反映しているのに対し、ゴスラーでは上部が八角形プランである点、開口部が正方形である点などが異なる。しかし、アルノルト・フォン・ヴィートの主君、コンラート3世との血縁関係がたどれるザリアー朝王家ゆかりの建築、ゴスラーの皇帝宮殿との関係は可能性として十分検討すべき課題であると言えるだろう。外観ではシュパイヤー大聖堂やマインツの二重礼拝堂の環状小型ギャラリーを抽出し、これをロトンダの外観に似せたアプシスの下部において、再編している。諸要素は高く積み上げられ、霊廟建築の造形的特質を見て取ることができる。

ギャラリーの北西の角には階段があり、玉座のある栈敷席へ上ることができた。これはコンラート3世のために用意されたものだと考えられている。玉座からは、八角形の開口部を通して、下部礼拝堂の主祭壇を見下ろすことができた(図11-C)。この空間構成はアーヘンの宮廷礼拝堂と酷似し、両者の強い結びつきを示している。階上に設けられた玉座からは主祭壇を見下ろすことができ、階下から見上げる人々に「救世主(もしくはその代理人)」としての皇帝を印象付けていた。カール大帝の玉座の場合はまさに救世主に捧げられた祭壇の前に置かれ、没後その遺体は救世主礼拝堂の真下に埋葬された可能性が高いとされている。すなわち、玉座の皇帝は、再臨した救世主のイメージと重ね合わされ、キリスト教世界の守護者として君臨したのである。シュヴァルツラインドルフの二重礼拝堂もまた、このような「教会高権」の理念を視覚化したものとも言えるだろう。

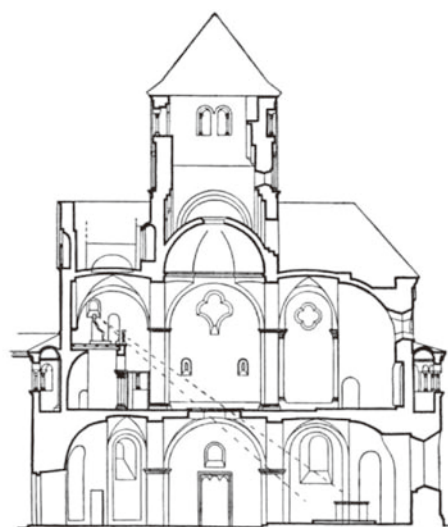
このような空間構成は、西構えの建築構想と密接に結びついている。皇帝関連施設である西構えの階上は、皇帝高廊として、身廊内部に開口し、ここから皇帝は主祭壇を見下ろすことができた。例えば、シュパイヤー大聖堂では、皇帝の間に玉座をおけば、ドーム、主祭壇、皇



A. 外観



B. 下部礼拝堂 内観



C. 桁行方向復元断面図

図11 シュヴァルツラインドルフの二重礼拝堂, 12世紀中頃

帝墓所が一望できる。信者の背後に位置する西構えにおいて、一段高いところに位置し、教会の守護者、救世主の代理人としての立場を視覚的に表そうとしたものだと推察される。

以上のように、皇帝あるいは王家の側近によって建設された建築群は、古代ローマと聖地の建築伝統を復興することによって「帝国の栄光」と、教会の守護者としての皇帝が聖俗両界に君臨する「神性」を備えた統治者であることを内外に示そうとしたものとも言える。西構えの階上席、あるいは二重礼拝堂の上部から祭壇を見下ろすというカール大帝以来の伝統も、そうした皇帝権の政治的立場の言明に他ならない。融合タイプの二重礼拝堂では、これが私有教会であることが矩形プランの外観によって明示され、高所から祭壇を見下ろすという上下の位階秩序によって「教会高権」の概念が視覚化されている。そして、同時に皇帝や諸侯の墓所として、霊廟としての象徴的意味を担っているのだと考えられる。

6. 結論

以上の考察に基づき、二重礼拝堂の造形的特質およびシュパイヤーの二重礼拝堂の歴史的定位と象徴的意味、政治上の機能についてまとめる。

本稿では、まず、二重礼拝堂をその起源にまで遡り、3つのタイプに分類した。これにより、個々の作例を東方タイプ、西方タイプ、そして両者の特徴を併せ持つ融合タイプに分け、シュパイヤー、マインツ、シュヴァル

ツラインドルフの二重礼拝堂に注目して考察した。そして、二重礼拝堂が「霊廟」としての属性を有すること、開口部を有するタイプはさらに「教会高権」の理念と密接に結びついていると結論した。

アーヘンの宮廷礼拝堂がそうであるように、中央部の吹き抜け空間、矩形もしくは八角形の開口部によって、君主は高い位置から祭壇を見下ろすかたちで各種の儀式に参列できた。中央の吹き抜け空間がドームを戴き、それが「天」を象徴するものならば、階上（上部礼拝堂）の皇帝や王（もしくは領主）は天により近いところにいる「神性」を帯びた存在として仰がれたことであろう。キリスト教は一神教であり、本来、皇帝崇拜や皇帝礼拝とは相容れない宗教である。しかし、カール大帝以来、事実としてゲルマン人の王が皇帝として西欧を治めることとなった。その際、皇帝が上部礼拝堂の玉座につくことで、下部礼拝堂にいる家臣が急な仰角の視線で階上の君主を見上げることになり、自然とわき起こる畏怖や崇敬の念が期待されていたと考えられる。二重礼拝堂は視覚的に皇帝や王の権威を印象づけるための政治的な「装置」であったと推察される。そして、二重礼拝堂が埋葬のための空間としても用いられたのは、中央の吹き抜け空間が示唆する「昇天」のベクトルによって、没後の皇帝を神格化する効果があったためであろう。

つまり、融合タイプの二重礼拝堂には「礼拝」と「埋葬」という機能の他に、アーヘンの宮廷礼拝堂から受け継いだ君主の権威を高めるという「政治上の機能」が加えられていたのだと考えられる。ロマネスクの建築は多

用途であるが故に、典礼空間と霊廟空間の両方の要素を融合した。さらには本来宮殿建築が担うべき政治的機能をも担う必要があった。その結果、ロマネスク特有の複雑な空間構成、そして密度の濃い装飾体系が生み出されたのだと結論付けられる。

また、本稿のもう一つの結論として、これまで二重礼拝堂としての特質が論じられていなかったシュパイヤーの二重礼拝堂の歴史的定位について、以下のような独自の説を提示した。

まず、大聖堂に隣接して建てられたシュパイヤーの二重礼拝堂は、東方タイプ、西方タイプ両方の要素を併せ持つ「融合タイプ」の最初期の作例であると結論付けることができる。また、これまでその建設目的は不明とされてきたが、当時教皇によって破門されていたハインリヒ4世の仮埋葬の場として計画された可能性が高いと言える。なぜなら、破門された王は聖別された大聖堂の中にある「皇帝墓所」に葬られる資格がなく、別の埋葬場所を用意する必要があったからである。祖父であるコンラート2世、父であるハインリヒ3世は、既にシュパイヤー大聖堂の身廊東端部にある皇帝墓所に葬られ、特別な権威が与えられていた。古代ローマでは皇帝はしばしば死後に神格化されたが、カール大帝以降の皇帝たちもそうした「聖」なる存在として没後顕彰されることを望んだのであろう。それが歴代皇帝の「カール大帝崇敬」や「カール大帝の列聖」となって現れ、ザリアー朝の皇帝たちも、その後継者として、単なる王 (rex) ではなく、王にして祭祀者 (rex et sacerdos)、すなわち皇帝として祀られることを期待していたと考えられる。それ故、ハインリヒ3世はシュパイヤー大聖堂の身廊部に一族の墓所を設けたのだと推察される。本稿において、筆者は、二重礼拝堂に霊廟建築としての属性があったことを明らかにした。その成果に基づき、シュパイヤーの二重礼拝堂は破門されたハインリヒ4世がローマ遠征の前に用意した自らの「仮の」墓所であり、破門を解かれ勝利者としてシュパイヤーに帰還した後、二重礼拝堂はその役割を失ったのではないかという仮説を提示した。

付記

本稿は以下の口頭発表の発表原稿に基づき、2011年の現地調査の成果を踏まえ、加筆修正を加えたものである。小倉康之「二重礼拝堂のイコノグラフィー」美学会東部会平成16年度第3回例会研究発表(於:早稲田大学)、2004年9月。ご助力、ご助言を頂いた皆様に、心より

感謝の意を表します。

注

- 1) シュパイヤー大聖堂と古代ローマ建築の関係性については以下を参照。小倉康之「シュパイヤー大聖堂—ザリエル朝皇帝権によるローマ建築の復興—」日本歴史文化学会編『風土と文化』第4号(2003)、1-10頁。
- 2) ロンバルド帯については以下を参照。小倉康之「ロマネスク建築の起源について(前編)—ロンバルディアの教会堂—」『Humanitas』第11号(2020)、玉川大学学術研究所人文科学研究センター、39-54頁。
- 3) ニッチ列については以下を参照。小倉康之「リボイのサンタ・マリア修道院聖堂—アブシス壁面構成に関する考察—」スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会編『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』第5号(2004)、1-9頁。
- 4) 小型ギャラリーについては以下を参照。小倉康之「シュパイヤー大聖堂の小型ギャラリー—象徴的意味と宗教上の機能について—」玉川大学芸術学部編『芸術研究11—玉川大学芸術学部研究紀要—2019』、1-15頁。
- 5) 以下を参照。小倉康之「教会教義と建築プラン」次書収録、新関公子監修『イメージとテキスト—美術史を学ぶための13章』ブリュッケ社、2007年、177-195頁。
- 6) 古都アーヘンは、現代ではドイツに属するが、カール大帝時代はフランク王国の中心地の1つであった。シュパイヤーやヴォルムスを拠点とするザリアー朝(フランケン朝神聖ローマ帝国)はサリール族出身であり、フランクの一支族であったため、カール大帝時代の都、アーヘンとの関連性が強いと言える。
- 7) 二重礼拝堂の研究史については、第2章において概略を述べるが、オスカー・シューラーやギュンター・バントマンの著作においては、シュパイヤーの二重礼拝堂に関する記述がなく、この作例は二重礼拝堂の発展におけるミッシングリンクであったと言える。
- 8) 本稿は主に2006年、2010年の現地調査の成果に基づく。それ以前の調査と研究成果については以下を参照。小倉康之「シュパイヤー大聖堂の研究」東京藝術大学大学院美術研究科博士論文、2001年。
- 9) *Reallexikon zur Deutschen Kunstgeschichte*, IV, 205, Abb. 9. (以下、RDKと略す。) RDKは現在ウェブで閲覧できる状況となっているため、本稿では一部図版を省略する。以下を参照。RDK, http://www.rdklabor.de/wiki/Doppelkapelle,_kirche (最終閲覧日: 2020年9月11日)。
- 10) MRUSEK, Hans-Joachim: *Romanik*, Leipzig 1972. または、以下の図を参照。小倉、前掲「シュパイヤー大聖堂の研究」図281。
- 11) MAAS, Walter/Herbert Woopen: *Der Aachener Dom*, 2. Aufl., Köln 1991, 11-13.
- 12) BANDMANN, Günter: Doppelkapelle, in: *RDK*, IV, 1955, 196-215.
- 13) 本稿、図1-Cを参照。開口部に付近に階上の人影がみ

られるが、上部礼拝堂からは逆に階下の人間を見下ろすことができる。小規模な二重礼拝堂では45度以上の仰角、俯角となるため、君主と家臣の身分の上下が強く印象づけられる。

- 14) GLATZEL, Kristine/Reinhard Schmitt: *Schloß Neuenburg*, München/Berlin 1993. または、以下の図を参照。小倉, 前掲「シュパイヤー大聖堂の研究」図 285。
- 15) SCHÜRER, Oskar: *Romanische Doppelkapellen. Eine typengeschichtliche Untersuchung*, Marburg 1929.
- 16) Bandmann, 1955, 196–215.
- 17) BADSTÜBNER, Ernst: Emporenkirchen und Doppelkapelle: Vergleich eines Architekturmotivs in der frühmittelalterlichen Sakralbaukunst Transkaukasiens und des Abendlandes, in: *Aachener Kunstblätter*, 58, 1989–1990, 75–86.
- 18) SCHÜRER, Oskar: *Die Kaiserpfalz Eger*, Berlin 1934, 92.
- 19) Bandmann, 1955, 197.
- 20) Bandmann, 1955, 209–212.
- 21) Bandmann, 1955, 198–204.
- 22) KRAUTHEIMER, Richard: Introduction to an 'Iconography of Medieval Architecture', in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 5(1942), 1–38.
- 23) FAVIERE, Jean: *Berry Roman*, La Pierre-qui-Vire 1970. または以下を参照。小倉, 前掲「シュパイヤー大聖堂の研究」図 45–48。
- 24) CHIERICI, Sandro: *Romanische Lombardei*, Würzburg 1978, 297–320.
- 25) Chierici, 1978, 321–324.
- 26) 小倉, 前掲「教会教義と建築プラン」185 頁。
- 27) Bandmann, 1955, 210–212.
- 28) KREUSCH, Felix: Kirche, Atrium und Portikus der Aachener Pfalz, in: *Kahl der Große*, hrsg. v. Wolfgang Braunsfels, Düsseldorf 1965, 463–533.
- 29) 1183 年頃建設。1895 年に破壊され、現存しない。Bandmann 1958, 212, Abb.13 を参照。
- 30) 小倉康之「第二次シュパイヤー大聖堂のアプシスと霊廟建築」美学会編『美学』第 53 巻第 4 号 (212 号), 2003 年, 42–55 頁。(= OGURA, Yasuyuki: The Apse of the Second Building Phase of Speyer Cathedral and Sepulchral Architecture, in: *Aesthetics*, 12 (2006), 81–94.)
- 31) クーバッハ等の修復, 調査研究の成果については以下を参照。KUBACH, Hans Erich/Walter Haas: *Der Dom zu Speyer, (Die Kunstdenkmäler von Rheinland-Pfalz Bd. V.)*, 3 Bde., München/Berlin 1972, Textband, 433–446.
- 32) Kubach-Haas, 1972, Textband, 440.
- 33) KUBACH, Hans Erich: *Der Dom zu Speyer*, Darmstadt 1974, 136.
- 34) JÖCKLE, Clemens: *Der Dom zu Speyer*, München u.a. 1988, 18.
- 35) Kubach-Haas, 1972, Textband, 443–446.
- 36) シュパイヤー大聖堂の「ドーム状交差ヴォールト」と「水平頂線の交差ヴォールト」の違いについては以下の論文

で詳述した。小倉康之「シュパイヤー大聖堂の交差ヴォールト」『横浜美術短期大学教育・研究紀要』VOL.03 (2007), 70–73 頁。

- 37) Kubach-Haas, 1972, Textband, 663 では 1096 年とされているが、ハインリヒ 4 世の帰国の年、おそらく 1097 年と考えるべきはないと思われる。ハインリヒ 4 世はヴェローナからアルプスを越え、バイエルン経由で帰国したとされているから、その途上でアウグスブルクに立ち寄ったときに聖アフラの聖遺物を手に入れたのだと推察される。
- 38) 『オットー伝 (*Vita Ottonis*)』の原文と日本語訳については以下を参照。小倉, 前掲「シュパイヤー大聖堂の研究」53–54 頁。
- 39) E. ヴェルナー『中世の国家と教会—カノッサからウォルムスへ 1077–1122—』瀬原義生訳, 未来社, 1991 年, 212 頁。
- 40) 12 世紀の記録『ベन्नノー伝 (*Vita Bennonis*)』による。日本語訳は以下を参照。小倉, 前掲「第二次シュパイヤー大聖堂のアプシスと霊廟建築」45 頁 (原文は 54 頁, 註 9)。
- 41) Jöckle, 1988, 18.
- 42) 古代ローマの霊廟建築の図版については、全て以下を参照。GIEDION, S.: *Architektur und das Phänomen des Wandels. Die drei Raumkonzeptionen in der Architektur*, Tübingen 1969. (=S. ギーディオン『建築, その変遷—古代ローマの建築空間をめぐって—』前川道郎・玉腰芳夫訳, みすず書房, 1978 年。)
- 43) 聖墳墓教会と霊廟建築の造形原理については以下を参照。小倉康之「キリストの墓を訪れる聖女たちの図像について—聖墳墓の建築表現を中心に—」『関東学園大学紀要 Liberal Arts』第 16 集, 2008 年, 27–60 頁。
- 44) RDK, Beinhaus の項を参照。ZOEPLF, Friedrich: Beinhaus, in: *RDK*, II, 1938, 204–214. または、以下を参照。RDK, <http://www.rdklabor.de/wiki/Beinhaus> (最終閲覧日: 2020 年 9 月 11 日)。
- 45) VERBEEK, Albert: *Schwarzhof. Die Doppelkirche und ihre Wandgemälde*, Düsseldorf 1953, 22–23.
- 46) この二重聖堂が建設されたシュヴァルツラインドルフには、かつてヴィート伯の城館があり、それは古代ローマ時代のボン城塞の防衛拠点として、ライン川の対岸に築かれた城に由来していた。11 世紀にはヴィート宮廷伯の所有となり、伯爵家の城館として整備されたが、アルノルト・フォン・ヴィートはこれを引き継ぎ、12 世紀の中頃、城館に付属する私的礼拝堂としてザンクト・クレメンス聖堂を建設した。アルノルトの没後、この聖堂はアルノルトの妹にあたるエッセンの修道女ハートヴィッヒに相続され、女子修道院付属教会堂として改められた。1170 年、現在の身廊にあたる西側 2 ベイ分の増築が行われている。現在は城館の遺構も女子修道院の関連施設も現存するものがほとんどないため、孤立した形で残され、教区教会堂として利用されている。
- 47) 献堂時の記録については以下を参照。Verbeek, 1953, 7.
- 48) Verbeek, 1953, 21.

主要参考文献

- BADSTÜBNER, Ernst: Emporenkirchen und Doppelkapelle: Vergleich eines Architekturmotivs in der frühmittelalterlichen Sakralbaukunst Transkaukasiens und des Abendlandes, in: *Aachener Kunstblätter*, 58, 1989-1990, 75-86.
- BANDMANN, Günter: *Mittelalterliche Architektur als Bedeutungsträger*, Berlin 1951 (10. Aufl. 1994).
- BANDMANN, Günter: Doppelkapelle, in: *RDK*, IV, 1955, 196-215.
- BANDMANN, Günter: Die Vorbilder der Aachener Pfalzkapelle, in: *Kahl der Große*, hrsg. v. Wolfgang Braunfels, Düsseldorf 1965, 424-462.
- GRODECKI, Louis: *Gothic Architecture*, Milano 1978.
- JÖCKLE, Clemens: *Der Dom zu Speyer*, München u.a. 1988.
- JUNG, Wilhelm: *Die Gotthardkapelle des Mainzer Domes. Zum Abschluß umfassender Restaurierungsarbeiten*, Mainz 1983.
- KRAUTHEIMER, Richard: *Studies in Early Christian, Medieval, and Renaissance Art*, New York 1969.
- KREUSCH, Felix: Kirche, Atrium und Portikus der Aachener Pfalz, in: *Kahl der Große*, hrsg. v. Wolfgang Braunfels, Düsseldorf 1965, 463-533.
- KUBACH, Hans Erich/Walter Haas: *Der Dom zu Speyer, (Die Kunstdenkmäler von Rheinland-Pfalz Bd. V.)*, 3 Bde., München/Berlin 1972.
- KUBACH, Hans Erich: Zu den romanischen Kapellen an den Domen von Mainz und Speyer, in: *Mainzer Zeitschrift. Mittelrheinisches Jahrbuch für Archäologie, Kunst und Geschichte*, 67/68, 1972/73, 118-121.
- KUBACH, Hans Erich/Albert Verbeek: *Romanische Baukunst an Rhein und Maas. Katalog der vorromanischen und romanischen Denkmäler*, Bd. I-III, Berlin 1976 (Bd. IV, Neuss 1988).
- MAAS, Walter/Herbert Woopen: *Der Aachener Dom*, 2. Aufl., Köln 1991.
- MINKENBERG, Georg: *Der Dom zu Aachen*, Aachen 1995.
- SCHÜRER, Oskar: *Romanische Doppelkapellen. Eine typengeschichtliche Untersuchung*, Marburg 1929.
- SEHMSDORF, Gottfried: *Die Doppelkapelle in Landsberg bei Halle*, München/Berlin 1993.
- VERBEEK, Albert: *Schwarzrheindorf. Die Doppelkirche und ihre Wandgemälde*, Düsseldorf 1953.
- WINTERFELD, Dethart von: *Die Kaiserdome Speyer, Mainz, Worms und ihr romanisches Umland*, Würzburg 1993.
- ZOEPFL, Friedrich: Beinhaus, in: *RDK*, II, 1938, 204-214.
- E. ヴェルナー著『中世の国家と教会—カノッサからウォルムスへ 1077~1122—』瀬原義生訳 未来社, 1991
- 五十嵐節子「アーヘン宮廷礼拝堂における空間構成—カール大帝の玉座をめぐる—」『美学』101(1975), 43-55.

図版出典

図 1-A, 1-B, 1-C, 図 10-A, 図 11-B : 筆者撮影。図 1-D: WINTERFELD, Dethart von: *Die Kaiserdome Speyer, Mainz, Worms und ihr romanisches Umland*, Würzburg 1993. 図 1-E: H. E. Kubach/W. Haas: *Der Dom zu Speyer*, München/Berlin 1972. 図 2-A, 2-B: SEHMSDORF, Gottfried: *Die Doppelkapelle in Landsberg bei Halle*, München/Berlin 1993. 図 2-C, 図 11-A : 松本智勇氏撮影。図 2-D, 図 10-C: SCHÜRER, Oskar: *Romanische Doppelkapellen. Eine typengeschichtliche Untersuchung*, Marburg 1929. 図 3-A : MINKENBERG, Georg: *Der Dom zu Aachen*, Aachen 1995. 図 3-B, 3-C: KREUSCH, Felix: Kirche, Atrium und Portikus der Aachener Pfalz, in: *Kahl der Große*, hrsg. v. Wolfgang Braunfels, Düsseldorf 1965, 463-533. 図 4-A, 4-B: GRODECKI, Louis: *Gothic Architecture*, Milano 1978. 図 4-C: F. バウムガルト著『西洋建築様式史』杉本俊多訳, 鹿島出版会, 1983 年。図 5 : BANDMANN, Günter: Doppelkapelle, in: *RDK*, IV, 1955, 196-215. 図 6-9: ZOEPFL, Friedrich: Beinhaus, in: *RDK*, II, 1938, 204-214. 図 10-B: JUNG, Wilhelm: *Die Gotthardkapelle des Mainzer Domes. Zum Abschluß umfassender Restaurierungsarbeiten*, Mainz 1983. 図 11-C: VERBEEK, Albert: *Schwarzrheindorf. Die Doppelkirche und ihre Wandgemälde*, Düsseldorf 1953.